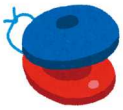
宇都宮市教育センター **かすたネット通信** 第４号
令和４年６月１日発行
発行者　所長　金子　渉



子どもが先生の言うことをきく理由

子どもたちに「あなたがＡ先生の言うことをきくのはなぜ？」と尋ねたとします。

Ｂ「先生の言うことは，きくのが当たり前だからです。」
Ｃ「先生の言うことは正しくて，大切なことだからです。」
Ｄ「先生の言うことをきかないと，叱られるからです。」
Ｅ「先生の言うことはききなさいと，親が言うからです。」
Ｆ「Ａ先生の言うことは，その通りだと思うからです。」
Ｇ「僕はＡ先生のことが好きだからです。」
Ｈ「Ａ先生に，僕のことを認めて欲しいからです。」
Ｉ「Ａ先生は怒ると怖いので，怒られたくないからです。」
Ｊ「言うことをきかないと，Ａ先生は許してくれないからです。」

Ｂ～Ｅは，「先生とは，こういうものだから」「先生に対しては，こうあるべきだから」と，教師全体を一括りにした理由付けです。多くの子は，個々の教師に対しては「好き／嫌い」等の感情があっても，よほど不本意なことでもない限り，誰が担任になっても基本的にこうした理解や価値観のもと従順に行動しており，そうした子たちによって学級集団の統制が保たれている側面があることは否定できません。

それに対してＦ～Ｊは，「Ａ先生がこうだから」と，自分とＡ先生との関係性が理由付けになっていますので，その先生個人の在り様や，それを自分がどう受け止めるかによって行動が変わってきます。教師にとっては，子どもから理解や支持を得るためのハードルが上がることになります。

教師が対応に苦戦を強いられるのは，Ｆ～Ｊのタイプの子です。教師の言動次第で例えば次のように受け止められてしまうと，不適応行動に発展しかねません。

Ｆ→「Ａ先生の話はよく分からないし，納得できません。」
Ｇ→「Ａ先生は，どうせ僕のことが嫌いなんです。」
Ｈ→「Ａ先生は，僕なんかいない方がいいと思ってます。」
Ｉ→「Ａ先生は，怒っても全然怖くなんかありません。」
Ｊ→「言うことをきかなくても，Ａ先生は許してくれます。」

実際には，このように言語化できる子は少ない（特に小学校下学年）ので，これらの思いを抱かせていないか，教師側の振り返りが大切です。実は，子どもは素直に反応しているという場合が結構あるものです。

【振り返りのポイント】

- **話は簡潔に，子どもが聞いて分かりやすく**
- **口調にはメリハリをつけて，表情豊かに**
- **その子の良さやがんばりを認める言葉を惜しまずに**
- **譲れない場面では，本気の迫力で向き合う**

感情的に語気を荒げることではありません。

担当　学校生活適応支援アドバイザー（飯山・大瀧）
TEL　６３９－４３９２